

1986年1月30日付でわれわれ吉田寮自治会で出したヒラ(2-3「在寮期限」粉碎!新自治権獲得!時計台前大集会へ集まろう)の裏面2-3大集会に結集し、全学・全国の連帯をうちたこそうくの見出しが始まる文章で以下の文;

「今日は學寮のみならず幅広く、大學再編や差別一抑圧と闘う諸団体と全学はもちろんのこと全国から」「だが、それだけではなく、より包括的に『在寮期限』粉碎して後もなお、国内再編・大學再編に抗するための全国的連帯其廟さもあるのだ。」について、その箇所を巻き戻すとともに、われわれ吉田寮自治会の見解を明らかにする。われわれ吉田寮自治会は、全国の政治団体を呼んで新たに党派的立場に立った階級斗争をつくりあげてゆく、という意図を有してはいない。われわれ吉田寮自治会は寮の自治会であって、階級斗争の全国方針を出すような党派ではない。われわれは寮の自治会としてこの立場から、全国再編・大學再編に抗する祖点をもって寮斗争を廟いめき、様々の廟う人々との連帯・其廟を求めてゆくものである。

しかし、今まで吉田寮自治会は、自治会として差別一抑圧と闘う方向性をめざしながらも、具体的な戦争を担ってきたわけではなかった。そろした具体的な戦争を担つてこなかった、われわれ吉田寮自治会が、差別一抑圧と手ている人々との連帯・其斗争を容易に提起したことは、われわれが京大生である立場性と、そろした連帯・其斗争創りあげてゆくことの困難性を描象したものであった。執行委員会がそろした認識なしに十分な討論を行なわぬまま全寮生に提起し、また、全寮生が真摯な討議を行なはず承認したこととは、十分な討議のもとでの全寮生一致による実践により早々と現化、発展させてゆくといわれわれの祖点においても、また、差別一抑圧と苦斗している人々との結び付きを真にわれわれのものとしてゆく上でも、はなはだ不十分であり、差別一抑圧と手て自治の内実を考え直さねばならないものであった。以上の点を真摯に反省し、すべての差別一抑圧と手て人々に対し、われわれ吉田寮自治会は謝罪と自己批判の意を明らかにしたい。今後、われわれ吉田寮自治会は、先に述べた、全国再編・大學再編に抗する祖点をもって寮斗争を廟いめき、差別一抑圧と手て自治の内実をさらに発展させる、という方向性をもって手てゆきたい。

1986年2月2日 吉田寮自治会